

【研究ノート】

言わなかったことをめぐって

——カミングアウト＜以前＞についての語り——

大坪 真利子

1. はじめに

「カミングアウト」は「coming out of the closet」という慣用句に発しており、「クローゼット」概念と固く結びついている。カミングアウトとは「自分以外の他者に対して、自らのセクシュアリティを明確な形で宣言すること（ゲイであるならば「ゲイ」である、と名乗ること）」（金田, 2003a, 127）を意味し、クローゼットとは、「自らのセクシュアリティを周囲からの圧力（抑圧、もしくは権力）によって表明することができない状況、言い換えれば、カミングアウトの可能性のある種の社会的圧力によってあらかじめ断たれてしまっている状況」（ibid., 127）をいう。1980年代から1990年代において、同性愛者の生活世界を、クローゼットとカミングアウトの観点からフレイミングする見方が浸透し（Seidman, Meeks and Traschen, 1999, 12-13）、クローゼットとカミングアウトという区分は、近代の同性愛者にまつわる問題を説明する基底となってきた（ibid., 9）。

近年、米国を中心として、ホモセクシュアリティの開示を「カミングアウト」として解釈されることや、過去を「クローゼット」として解釈されることを否定する語が見られるようになってきている。たとえば、「カミングアウトをした」と報道された著名人のケースのうち、「カミングアウトではない」と報道そのものに意義を申し立てる発言（Inbar, 2011）や、セクシュアリティを公に開示しないでいた過去を「クローゼットにいたわけではない」（Inbar, 2011）「隠していたわけではない」（Portwood, 2012）「プライベートなことなので言わなかった」（Inbar, 2011; Portwood, 2012; Sullivan, 2012; Guardian co.uk, 2013）と説明するケースがその例に挙げられる。

これらに共通する特徴は、セクシュアリティが非開示だった過去を、「言うことも言わないことも可能」な中、状況に応じて「選択」した沈黙であったと説明する点にある。たしかに1990年代後半にかけて、「カミングアウト／クローゼット」の二項対立が同性愛者の生活世界にもはや当てはまらなくなっているという報告がすでになされている。Seidmanらは「Beyond the Closet」と題した論文の中で、現代の同性愛者の生活世界においては、セクシュアリティの非開示が必ずしも抑圧状態にあるとはいえなくなってきたと指摘し、クローゼット概念は再検討される必要があると主張した（Seidman et al, 1999）。しかし、彼ら彼女らが、わざわざその過去を「言うことも可能であったが言わなかった」と説明した上

でそのセクシュアリティを開示する、振る舞いそのものについては、Seidman らが考察した同性愛者の生活世界の変容とは別の形の考察が必要と考える。彼ら彼女らは、なぜ「カミングアウト」あるいは「クローゼットへの引きこもり」という解釈を退けようとするのか。またそのような振る舞いに社会的意義があるとすれば、それはどのようなものだろうか。

ホモセクシュアリティの開示が「カミングアウト」としてメディアに認知されるためには、「カミングアウト」という行為を解釈する知識が社会的に共有されていなくてはならない。メディアからの「カミングアウト」「クローゼットへの引きこもり」という解釈を退ける、彼女彼らの振る舞いを理解するためには、ホモセクシュアリティの開示／非開示を「カミングアウト／クローゼット」と認知する枠組がどのように成立し、どのように意味付けられてきたかを知る必要がある。

本稿では、まず、ゲイ・レズビアンアイデンティティの構築およびその可視化に貢献してきた同性愛解放・抵抗運動における言説をたどり、ホモセクシュアリティの開示と非開示が、どのような政治的な意味づけをされてきたかを振り返る。次に、ホモセクシュアリティの開示／非開示を「カミングアウト／クローゼット」とみなす解釈枠組が、現在どのような困難を同性愛者にもたらしているのかを考察する。これらを踏まえた上で、自らの過去を「セクシュアリティの開示／非開示の両方が選択可能だった状態」として位置づけながら、セクシュアリティを開示する語りの振る舞いが、どのような意味をもちうるかを指摘する。

2. ホモセクシュアリティの開示をめぐる言説

ここではホモセクシュアリティの開示がどのように政治的実践として語られてきたのかを振り返り、ホモセクシュアリティの非開示がどのような位置づけを与えられてきたのかを指摘する。

(1) 抑圧からの解放として

1969年に起きた米国ストーンウォール暴動をきっかけにして広がった、同性愛者の解放運動以降、ホモセクシュアリティの開示は「カミングアウト」という積極的な政治的実践として意味されるようになった。ストーンウォール暴動では、ニューヨーク州グリニッジ・ヴィレッジにあるゲイバー「ストーンウォール・イン」への警官の手入れに反発した客が、三日間にわたって店内に立てこもったとされる。

同性愛者の社会運動はストーンウォール暴動以前にも存在していたが、それらはあくまで同性愛を個人の嗜好として寛容をもとめるような消極的な運動にしか過ぎず、同性愛者を「性的逸脱者」「精神病者」と見なす社会規範そのものに意義を申し立てる運動ではなかった。当時の運動はホモファイル運動と呼ばれ、世間のジェンダー規範を侵犯するようなドラッグクィーンやブッチの女性を自分たちから切り離そうとしたり（河口, 2003, 14）、同性愛者がよりよい社会的地位を得られるように、ジェンダー規範に適合した格好をするよう推奨したり（飯野, 2008, 36）と、「社会規範に対して同化主義的、適応主義的」（ibid.）なアプローチを採用していた。

その後、ホモファイル運動はストーンウォール暴動をきっかけに、Wilhelm Reich や Herbert Marcuse といった解放主義者らの理論的影響をうけながら、社会的抑圧からの性の解放を目指す解放運動へと転換していった（風間, 2002, 350）。Altman が「ゲイ解放の本質とは、ゲイネスを主張すること、同性愛者であることで恥や罪を感じることを拒否することにある」（Altman, 1971=2010, 168）と述べたように、解放運動では、デモに参加し「声に出して言おう。われわれはゲイだ。われわれは誇りに思っている」（ibid.）とホモセクシュアルな自己を肯定的なものとして再定義していく行いが「一つの解放の行為」（ibid.）として主張された。このような「カミングアウト」解放言説のもと、「カミングアウト」は、社会的抑圧から性の解放を目指す政治的な実践として捉えられるようになり、同性愛者らは「ゲイであること」を「積極的なゲイ経験」（Plummer 1995=1998, 173）として語るようになっていった。

（２）従属として

ストーンウォール暴動以降、解放言説が「カミングアウト」という政治的实践に人びとを動員していった一方で、「カミングアウト」という行為そのものが抑圧状況をつくり出している、という批判が、社会構築主義的立場から現れる。Foucault が指摘したような、カミングアウトを性の告白システムと同一視する見方はその代表である。権力が生み出す性的欲望装置の中では、生殖にまつわる性以外は逸脱とされ、逸脱者は自らその逸脱を告白するよう煽動されているという（Foucault, 1976=1986, 136-142）。つまり、性的欲望装置の中では、「カミングアウト」は抑圧からの解放の実践とはならず、むしろ権力によって煽動された逸脱者の告白である。このような見方のもと、同性愛者がセクシュアリティで自分を定義している限り、同性愛者は性的欲望装置の権力関係から解放されることはないとして、「性のタームによって自己をアイデンティファイする」戦略は避けるべき（赤川, 1996, 132）という、「カミングアウト」への批判がなされた。

（３）抵抗として

このような批判をうけ、「カミングアウト」を「解放ではなく抵抗の実践」と位置づける主張がされるようになる。風間は、赤川が避けるべきこと主張する「性のタームによって自己をアイデンティファイすること」（ibid.）を、そもそも避けられないことが、同性愛者の抑圧であると主張する。

性のタームでアイデンティティを得ることから脱出している状態とは、性についての言説の爆発によって異性愛が語られない規準として構築されたことに示されるように、権力関係の中で無徴の位置を付与されていることではないのか。そうであるなら、同性愛者のアイデンティティやカミングアウトの実践をセクシュアリティの装置の内部にあるとして批判することは、装置の内部にあるにもかかわらず、無徴としての自らの位置を問いたさないことによって成立していると言える。（風間, 2002, 354）

異性愛者はカミングアウトする必要がなく、「ヘテロセクシュアル」というアイデンティテ

ィを主張「しない」という選択ができる。しかし同性愛者は「ホモセクシュアル」というアイデンティティを主張をしない選択ができないようになっている。風間が指摘するのは、異性愛はわざわざ語られる必要がないという意味で「無徴」とされる一方で、同性愛者はその性的指向の語りが有徴化されてしまう点である (ibid., 354)。たとえば「エスニック・アイデンティティを主張しない選択が白人にのみ可能であるのは白人が数の上だけでなく政治的・社会的権力を有するマジョリティであるからなのだと主張を敷衍するならば」 (ibid.)、同性愛者というアイデンティティを選択しないという「選択可能性」は同性愛者に「担保されて」いない (ibid.)。

風間は、同性愛が公領域からアプライオリに排除され、私領域に閉じ込められているとし、同性愛はその性を私的なこととして公的に表明しなければ「嘘をついている」として制裁されることから、ホモセクシュアリティが「公私」両領域から排除されているとする。この上で、(私的・個人的なものとされる事柄を公的・政治的に表明する) カミングアウトとは、「公私」の区分定義を暴き、告発していく抵抗の実践であると主張した (ibid., 356-362)。

このように、抵抗言説は、ホモセクシュアリティの開示を政治実践として捉える解放言説の枠組を引き継いだ上で、「カミングアウト」は権力の外に脱出する解放の実践ではなく、権力の中にとどまりつつ、内部からその権力関係を対象化し、変革する実践と論じている。

以上のように、ホモセクシュアリティの開示は「カミングアウト」として、解放言説・抵抗言説の理論的枠組の中、政治的な意味付けがなされてきた。これらの言説のもと、同性愛者は「カミングアウト」を実践することで、同性愛者の社会的可視化に貢献していった。

(4) ホモセクシュアリティの非開示へのまなざし

ホモセクシュアリティの開示を政治実践として位置づける解放言説と抵抗言説の枠組では、ホモセクシュアリティの非開示を、「抑圧によってホモセクシュアリティが開示できない」状態として捉える。

解放言説では、ホモセクシュアリティの開示は政治的に有効な実践として位置づけられ、セクシュアリティの非開示は、抑圧に屈服した「クローゼット」への引きこもりとして解釈される。Halperin は「クローゼットのなかにいる唯一の理由は、自分の恥ずべき性的指向が世に知られたら被ることになる、たくさんの悪意に満ちた社会的不利益から身を守るため」であり、そのような状態は、「自分をゲイとはみなさない人びとがゲイに押し付けた社会的強制に身を屈すること」と同じ、「不自由」な「閉じ込め」であると表現している (Halperin, 1995=1997, 48)。

社会構築主義からの批判を経て生まれた抵抗言説においても、ホモセクシュアリティの開示は積極的な政治実践として意味づけられ、ホモセクシュアリティの非開示は抑圧状態とみなす解放言説の基本的枠組が、引き続き採用されている。

解放言説と抵抗言説に通底するのは、ホモセクシュアリティの開示は「成熟した、政治的に有益な」(Adams, 2008, 23) 行為であり、非開示の状態は「不健全であり、未成熟、政治的に無効である上に、自身の同性愛嫌悪や自己嫌悪」(ibid.) の現れと見なす枠組である。この枠組は、同性愛者にとってホモセクシュアリティの開示を、「決定的終局を伴った非連

続的、直線的な過程であり、逃れようがなく、常についてまわる人生を形作るプロセス」(ibid.)として位置づけ、ホモセクシュアリティの非開示を、セクシュアリティの開示に向かうべき段階として位置づける。

3. カミングアウトという解釈と実践

以上のように、同性愛者のホモセクシュアリティの開示は、解放言説および抵抗言説をつうじて、抑圧的な社会に変革をもたらす政治的実践として論じられてきた。同性愛者がそのような枠組にのっとって「カミングアウト」を実践することで、同性愛者の社会的可視化は進み、ホモセクシュアリティの開示を「カミングアウト」、非開示を「クローゼット」と解釈する枠組が社会に浸透していった。

しかし、「抑圧状態からのカミングアウトへ」というストーリーの浸透は、次の問題を引き起こすようになる。個人のホモセクシュアリティの開示を「クローゼットからのカミングアウト」というストーリーに還元させることで、その語りを枠づけてしまう。川坂は、「ある文脈に置かれた「カミングアウト」という言葉自体が遡及的に」「どのような振る舞いが「カミングアウト」であるか、何をもって「政治的行為」とみなし社会の「変化」が起きたと記述することができるのか、「カミングアウト」が可能な主体は誰か、「抑圧構造」とは何か」を規定してしまうことを指摘している(川坂, 2008, 71)。個人のホモセクシュアリティの開示が「カミングアウト」と恣意的に解釈される構造の中では、「クローゼットから出るカミングアウト」という行為やそれを生じさせる「抑圧構造」、そしてカミングアウトを行なう主体である「抑圧された同性愛者」というアイデンティティは規定される。

しかし現代において、同性愛者のホモセクシュアリティの開示／非開示を、一律的に「カミングアウト／クローゼット」という二項対立で捉えることは適切とは言えない。近年、ホモセクシュアリティの開示／非開示は個人の選択の結果である可能性¹(金田, 2003b)や、そのような選択が可能になる社会的条件の変化(草柳, 2004)がすでに論じられている。

たとえば草柳は、社会分化が進んだ現代では、個人は社会改変にむけて問題経験を表明するだけでなく、「その原因があると認識する状況から撤退し他所へ行く」選択をするという可能性を指摘する(草柳, 2004, 54)。このような状況では、同性愛者の「二重生活という選択の可能な局面が少なくない」(ibid.)。つまり社会分化が進んだ現代では「カミングアウトしないでいること」の選択可能性が上昇し、カミングアウトが「できない」という抑圧経験そのものが減少してくる可能性も考えられる。

また金田は、同性愛者が自身のセクシュアリティに対して肯定的感情をもっている、
「一定の人間関係が維持できるのであれば、カミングアウトは表舞台に登場することはない」と指摘する(金田, 2003b, 71)。また金田によれば、セクシュアリティの開示は必ずしも政治的実践として行われているのではなく、「本人がより良いと望む関係性を構築するため」の「道具」として用いられているのだという(ibid., 75)。

このように、現代においてセクシュアリティを開示しない個人が、異性愛主義的な眼差しを恐れて「カミングアウト」をしたくてもできない抑圧状況にあるとは、一面的に言い

¹バイセクシュアリティの開示選択については(McLean, 2007)を参照。

難くなってきている。金田が示唆しているように、開示の必要や機会がないためにホモセクシュアリティが開示されていない状況も考慮に入れると、ホモセクシュアリティの非開示の状況は個人によって多様であると考えられる。

たしかに「カミングアウト／クローゼット」という二項対立に基づく解放言説や抵抗言説は、現代の同性愛者に対する抑圧の軽減に大きく貢献したと考えるべきであろう。セクシュアリティを開示していない状態を抑圧された状態とし、カミングアウトを社会変革の政治的実践としてとらえる見方の背後には、歴史的な文脈が存在している。たとえば、1980年代の米国のエイズ危機では、ホモセクシュアリティの開示による同性愛者の可視化こそが、当時唯一政治的に有効な手段であった。当時の同性愛者が「沈黙は死」というスローガンのもと、仲間や自身のために命がけでカミングアウトを行なった歴史的な文脈は無視できない。ホモセクシュアリティの非開示状態を「抑圧」として捉える視点は、同性愛者の問題経験を語る上で軽視できない観点であり、今後とも必要とされるだろう。

しかしそのような「カミングアウト」の成果として、同性愛者・異性愛者を取りまく政治的・社会的状況が変化してきたのならば、二項対立のもと、ホモセクシュアリティの開示を政治的実践、あるいは開示していない状態を「クローゼット」への引きこもりと一面的に見なす見方には限界があるといえる。

現代のホモセクシュアリティの非開示をめぐる個人の多様な状況を踏まえると、個人のホモセクシュアリティが開示された語りを、「クローゼットからのカミングアウト」と解釈し、セクシュアリティを開示していない同性愛者を「社会的抑圧のためにホモセクシュアリティを隠している」と見なす枠組自体が、同性愛者への抑圧を生み出す危険がある。ホモセクシュアリティを含む語りを「カミングアウト」として一面的に解釈することは、語り手のホモセクシュアリティを根拠に個人の語りを枠づけすることである。このような枠組のもとでは、「同性愛者が特殊であり異性愛者が標準である」という異性愛中心的な状況が再生産され、同性愛者は「その立場を表明しなければ、存在しないものとして認識の埒外に置かれる」（堀江, 2008, 112）。つまり、ホモセクシュアリティの開示に対して一面的に「カミングアウト／クローゼット」という二項対立が適応されつづける状況では、「カミングアウト」をしない限り、同性愛者は不可視であり続け、同性愛者が「カミングアウトしなくてもやっていけるような状況」（金田, 2003b, 77）はいつまでも到来することがない。

以上をふまえると、先述した、カミングアウトと報道された著名人の振る舞いのケースは、このような枠組への抵抗と考えることができる。例えば Weir 氏は自叙伝の出版を「カミングアウト」と報道されたことに対し「カミングアウトをしたのではない」「ゲイとしてではなく Johnny Weir であることを主張した」とコメントしている（Inbar, 2011）。これらの発言は、Weir 氏がその半生を綴った自叙伝（Weir, 2011）を、同性のパートナーについて言及した箇所のみを根拠として、「カミングアウト」に還元してしまう解釈枠組への異議申し立てと捉えることができる。また、ホモセクシュアリティを開示しないでいた過去を「状況に応じて選択した沈黙であった」と強調する振る舞いは、ホモセクシュアリティの開示を「抑圧的なクローゼットからのカミングアウト」と解釈する枠組からの脱出の試みと考えることができる。さらに、セクシュアリティの開示以前を「語ることも語らないことも可能な状況であった」と語る振る舞いは、いま現在ホモセクシュアリティを開示せずに社会に潜在しているであろう同性愛者の存在を示唆するという意味において、政治的な

効果をもつと考えられるのではないか。

4. まとめ

ホモセクシュアリティの開示を政治的実践と捉え、非開示の状態を抑圧と捉える「カミングアウト／クローゼット」の二項対立は、同性愛者の「カミングアウト」の実践を促し、同性愛者の可視化に貢献してきた。しかし同性愛者による「カミングアウト」の実践とともに、「カミングアウト」という行為そのものの認知が浸透した現代の社会では、ホモセクシュアリティの開示は「クローゼットからのカミングアウト」という語りに還元され、同性愛者は特殊な存在として析出されてしまう。このような枠組のもとでは、異性愛者が標準とされ、同性愛者が「カミングアウトしなくてもやっていけるような状況」（金田, 2003b, 77）は成立しえない。

冒頭で紹介した、セクシュアリティ非開示の過去を、従来の「クローゼット」としてではなく、選択的に「言わなかったこと」として語る振る舞いは、そのような「カミングアウト／クローゼット」という二項対立的枠組への抵抗と考えることができる。彼ら彼女らはホモセクシュアリティを開示していなかった過去を、「隠していたのではなく言わなかった」と表現する振る舞いを通じて「クローゼット／カミングアウト」の二項対立を解消している。またこの振る舞いは、ホモセクシュアリティを開示する同性愛者だけでなく、社会に潜在するホモセクシュアリティを開示していない同性愛者をも、同時に示唆するような可能性をもっていると考えられる。

【参考文献】

- Adams, Tony E., 2008, "Learning, living, and leaving the closet: Making gay identity relational". University of South Florida Department of Communication College of Arts and Sciences Graduate School Dissertations.
- 赤川学, 1996, 『性への自由／性からの自由：ポルノグラフィの歴史社会学』, 青弓社.
- Altman, Dennis, *Homosexual: Oppression and Liberation*, Outerbridge & Dienstfrey, 1971, new ed., 1993. (=2010, 岡島克樹・風間孝・河口和也訳『ゲイ・アイデンティティ——抑圧と解放』岩波書店.)
- Foucault, Michel 1976, *La volonté de savoir Volume 1 de Histoire de la sexualité*, Gallimard: Paris (=1986, 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社.)
- Halperin, David M., 1995, *Saint Foucault: towards a gay hagiography*, Oxford University Press, New York (=1997, 村山敏勝訳『聖フーコー ゲイの聖人伝に向けて』太田出版.)
- 堀江有里, 2008, 「〈クローゼットから出る〉ことの不/可能性——レズビアンをあいだに措定される〈分岐点〉をめぐる」『解放社会学研究』22: 102-118.
- 飯野由里子, 2008, 『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』生活書院.
- 金田智之, 2003a, 「『抵抗』のあとに何が来るのか？—フーコー以降のセクシュアリティ研究に向けて—」『年報社会学論集』16: 126-137.
- 金田智之, 2003b, 「カミングアウト」の選択性をめぐる問題について『社会学論考』24:

61-81.

- 川坂和義, 2008, 「「カミングアウト」の困難」『ジェンダー&セクシュアリティ』 3:59-75.
- 河口和也, 2003, 『クィア・スタディーズ』 岩波書店.
- 風間孝, 2002, 「カミングアウトのポリティクス」『社会学評論』 53(3): 348-364.
- 草柳千早, 2004, 『「曖昧な生きづらさ」と社会—クレイム申し立ての社会学』 世界思想社.
- McLean, K., 2007, "Hiding in the closet? Bisexuals, coming out and the disclosure imperative.", *Journal of Sociology*. 43(2): 152-166.
- Plummer, Ken, 1995, *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*, London and New York, Routledge (=1998, 桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳『セクシュアル・ストーリーの時代——語りのポリティクス』 新曜社.)
- Seidman, S., C. Mecks, and F. Traschen., 1999, "Beyond the Closet? The Changing Social Meaning of Homosexuality in the United States." *Sexualities*, 2: 9-34.
- Weir, Johnny, 2011, *Welcome to My World*. Gallery Books: New York.

【Web 資料】

- Guardian.co.uk, 2013, "Jodie Foster's Golden Globe acceptance speech: full transcript", The Guardian (Retrieved January 21, 2013, <http://www.afterellen.com/content/2013/01/jodie-foster-comes-out-rambling-raw-speech-golden-globes>) .
- Inbar, Michael, 2011, "Johnny Weir: I don't define myself as gay", Today Book News, (Retrieved January 21, 2013, <http://today.msnbc.msn.com/id/40999783/ns/today-books/#.T5dxFLOEKf4>) .
- Portwood, Jerry, 2012, "As an out U.S. Olympic soccer player, Megan Rapinoe's got balls.", Fever Pitch, OUT. (Retrieved January 21, 2013, <http://www.out.com/travel-nightlife/london/2012/07/02/fever-pitch>) .
- Sullivan, Andrew, 2012, "Anderson Cooper: 'The Fact Is, I'm Gay.'", The Dish, The Daily Beast. (Retrieved January 21, 2013, <http://andrewsullivan.thedailybeast.com/2012/07/anderson-cooper-the-fact-is-im-gay.html>) .